

北海道大好き！～アイヌ語ゆかりの北海道の地名（第8回）

当社は、白老町において7月12日にオープンを予定しているアイヌ文化復興等に関するナショナルセンター「民族共生象徴空間（愛称：ウポポイ）」の「交流促進官民応援ネットワーク」に参画しています。

その開館がよいよ近づいてきました。先住民族が使っていたアイヌ語を起源とした地名が多く残る我らのふるさと北海道。北海道で使う電気を生み出している発電所所在地の地名などについて、その由来をご紹介します。どうぞお楽しみに。

第8回目は、泊発電所です。

泊村（ヘロカルウス）

積丹半島の西の付け根に位置する泊村は、古くから鯨（にしん）漁で栄え、明治期には最盛期を迎え、多くの鯨番屋が立ち並びました。村内には、鯨漁の繁栄の面影を今に残す「鯨御殿」があり、往時を忍ばせています。



泊発電所（左から1, 2, 3号機）

また、泊村茅沼（かやぬま）地区では江戸時代末期に石炭が見つかったことに端を発し、その後茅沼炭鉱として多くの石炭が採掘されることとなります。その石炭は、岩内の港を経由して、本州方面に運ばれました。炭鉱の隆盛により、最盛期の泊村には、1万人ほどの人口がいたようです。この茅沼炭鉱は北海道最古の炭鉱として明治から昭和初期の国のエネルギー政策を支えました。そしてその後、1964（昭和39）年にはその役割を終え、108年におよぶ歴史に幕を下ろしました。

当社は、1973、79年の2度にわたるオイルショックなどもあり、電源の多様化、エネルギーセキュリティ確保の観点から、原子力発電を推進し、1989（平成元）年6月に当社初の原子力発電所である泊発電所1号機（出力57.9万kW）の運転を開始させました。その後1991年に2号機（同57.9万kW）、2009年に3号機（同91.2万kW）を戦列に加えました。

このように泊村は、炭鉱や原子力発電所が北海道で初めて存在したところであり、「エネルギーのふるさと」と言うことができるのではないのでしょうか。

泊発電所の建設時に設置されていた泊原子力発電所建設所の所在地は「泊村大字堀株村字ヘロカルウス」でした。この「ヘロカルウス」は、ヘロクカルシ（herok kar-usi : heroki（にしんを）・kar（捕る）・usi（いつもするところ））に由来するとされています。礫岩のある海岸で、にしんがよく獲れたところは、アイヌ語地名研究者・山田秀三氏によれば、どこも似たような地名になっているそうです。

（出典：山田秀三「北海道の地名」）